

大宮見沼

よみさんぼ

第20号

写真家 野口勝宏

やどかりの里発！ 地域発見マガジン

特集

生活都市が生み出すアートな世界

さいたまトリエンナーレ 2016開催～閉幕

編集 公益社団法人やどかりの里「大宮見沼よみさんぼ」編集委員会

特集

生活都市が生み出す アートな世界

さいたまトリエンナーレ 2016開催～閉幕

2016（平成28）年9月24日（土）～12月11日（日）までの79日間、さいたま市で「未来の発見！」をテーマに「さいたまトリエンナーレ2016」が開催されました。3年に一度開催される芸術祭という意味をもつ「トリエンナーレ」の開催はさいたま市では初。市内主要3エリアを始め、各地でアートイベントが実施されました。

今回は、さいたまトリエンナーレのプロジェクトディレクターの1人である三浦匡史さん（NPO法人都市づくりNPOさいたま理事・事務局長、地域生活デザイン代表）とアシスタントディレクター・小林夢実さんにお話を伺いました。

文化芸術都市さいたま市

「さいたま市ってどんな街？」「特徴は？」と聞かれて、皆さんは何を思い浮かべるでしょうか。サッカー好きの人は、浦和レッズや大宮アルディージャのホームであることから「サッカー」と言うでしょうし、「鉄道」「盆栽」「漫画」

「人形」「見沼たんぼ」など、思いつくものがある人もいるでしょう。

三浦さん曰く、「さいたま市にはいろいろなものがあるんですよね。だから、どれか1つになんて決められない。でも決めなくていいと思うんです。それがさいたま市だから……」

127万を超える多くの人々が生活しているさいたま市、それぞれが思うさいたま市の特徴やイメージは、どれも「さいたま市」を表すものに違いありません。さいたま市のイメージをどれか1つにしようとする、その1つ以外のものは切り捨てることになってしまいます。でも、どんなことも、どんなものも、どんな人も排除しない、受け入れられる、多様性とそれぞれの価値を認め合える街になれば……三浦さんのさいたま市への思いを感じる一言です。

さて、そんな魅力あふれるさいたま市では、2012（平成24）年に文化芸術都市創造条例を施行しました。この条例は、多様な歴史文化資源や文化芸術を活用しながら「生き生きと心豊かに暮らせる文化芸術都市」を創造することを目的に制定されたものです。そして、その象徴的・中核的な事業として位置づけられたのが「さいたまトリエンナーレ2016」でした。

さいたまトリエンナーレ2016

日本では、越後妻有や瀬戸内のような自然あふれる地域、横浜や愛知（名古屋）のような大都市で数多く芸術祭が開催されています。さいたま市は、東京のベッドタウン、まさしく「生活都市」。さいたま市でどんな芸術祭を開催すればよいのか、プロジェクトチームを中心に検討が進められ、中核となるアートプロジェクトについて、アーティストや場所の選出が行われました。

芸術性はもちろん、国際的に注目される34組のアーティストを国内外から招聘し、「生活都市」さいたま市らしさを浮かび上がらせる象徴的な主要3エリアを、大宮、浦和・与野、岩槻に設定しました。アーティストは、実際にさいたま市を訪れリサーチを重ね、時には市民との交流を通じてその場所の自然や歴史、秘められた可能性や関係性を見出し、そこから未来につながるきっかけとなるような、新作アート作品を生み出しました。

さいたまトリエンナーレでは、作家個人の作品展示におさまらず、アートプロジェクトとして企画されたことも特徴の1つです。34のアートプロジェクトは、それぞれにプロジェクトディレクターやアシスタントディレクターが制

作プロセスに関わり、アーティストと対話しながらつくり合うプロセスが大切にされました。「アートを鑑賞するだけでなく、ともにつくり、参加する」という取り組みは、制作段階から始まっていたのです。

アーティストは、インスタレーション^{注)}を中心に、映像や音楽・パフォーマンスなど幅広い表現形態の新作を生み出しました。参加したアーティストも、画家や彫刻家、音楽家、小説家、劇作家、建築家と多彩な顔ぶれ。その作品からは、「アート」というツールを用いた「表現」であることを感じさせられます。「アート」はさいたま市を全国に周知するための「シティセールス」ではないのです。作品を通して、その場所の歴史やそこに暮らす人を浮かび上げさせ、観る人の感性に訴え、さいたま市の未来を見つけていくきっかけだったのだと思います。

「共につくる・参加する」～いろいろな形をきっかけに

そして、アーティストが「つくる」ものを「観る」だけでなく、市民が「共につくる」「参加する」ための企画も実施されました。2015年度に開催された「さいたまスタディーズ」では、地質、気象、歴史、文化……さまざまな視点で、さいたま市という地域の研究を行いました。その研究の成果を参加アーティストや市民に公開し、トリエンナーレにつなげたのです。



「市民プロジェクト」では、市民活動との協同を模索しました。絵画、能楽、マジックなどアートを気軽に体験できる「アート・ワークショップ・フェスティバル」や、音楽やアートで潤いと豊かな文化あふれる街づくりを進めようと実施された「にぎわいアート大宮」、市内の文化施設などを会場として、演劇、音楽、パフォーマンス公演やアート作品展示を企画・実施した「文化芸術フェ

注) 展示空間の壁や床に、空間と有機的な関係を持つよう立体作品を設置する方法、ないしはその作品

スタ in さいたま」などが行われました。また、トリエンナーレを支えるボランティア、「サポーター」としての参加もありました。



さいたまトリエンナーレ 2016 を終えて

粋をつくらない参加のスタイルで、多くの人に関わってつくり上げたさいたまトリエンナーレ。開催に際しては、広報PRや事業費、担当職員の超過勤務の問題などが報道され、賛否両論がありました。清水勇人市長は今後について、3年に一度という開催時期にはこだわらず、反省点も踏まえ、継続的な開催を目指す方針を示しています。

三浦さんに開催終了後の今の気持ちをお聞きました。

「プロジェクトディレクターの1人としては、大変なこともありましたが、さいたまでトリエンナーレを開催できたことはよかったと思っています。そして、今回の取り組みで見えてきた課題を次回にしっかりつなげていくことを前提に、今後も継続していければいいと思っています」

取材を終えて

お話をお聞きしながら、さいたまトリエンナーレの魅力は、アーティストによるアート・表現を切り口に、多くの人とその街を知り、考え、関心をもつことでもあったと感じました。街は、そこにいる個性あふれる人たちがつくりあげるものです。「右向け右」と物事が進まないからこそ、対話し、理解し合うことが大切です。「アート」という切り口が、さいたま市という街の新たな魅力を引き出し、そこで暮らす人々のつながりを広げる可能性を秘めていることを感じるひとときでした。

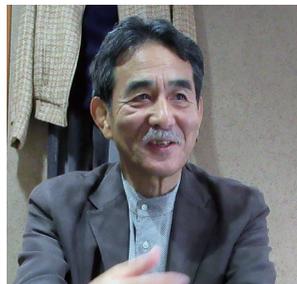
(記 宗野 文)

* 2p, 5p 写真提供 櫻井一二三さん

さいたまの匠

柴田 ^{さとる} 覺

(株式会社エム・ジー・アール代表取締役)



前回の“さいたまの匠”でご紹介した山崎光夫さんは、寺社建築において技能を発揮されました。その寺社に行くと屋根には吹流し、玄関幕、本堂には五色幕、仏具を置く棚や台の上に美しい敷物があることに気が付きます。また僧侶は格式や目的により様々な衣服を身に着けています。今回取材をしたのはこれら寺院の布にまつわる仕事をされている、柴田覺さんです。

作務衣からはじまる法衣づくり

柴田さんは1948(昭和23)年青森県に生まれ、大学卒業後、株式会社丸井に婦人服のバイヤーとして18年ほど勤務し、日本各地の染織品産地を訪れ、着物など「布」に係る企画やモノづくりの仕事に携わりました。そして独立、この時培った様々なネットワークの中で、ある時「この生地で作務衣を作ってくれないか」という注文に応じたことが法衣づくりの始まりでした。しかし“法衣の仕立て技術は外へは出さない”という保守的な世界であり、型紙はありません。そこで法衣を解いて自ら型紙を作ることから始めました。そして、織りの産地と手を結び、時には手織りの麻、有名作家の織った絹が法衣となり、お寺に納められていきました。また仏旗、五色幕、吹流し、更には座布団や打敷(テーブルセンターのようなもの)など布を使う様々な品の注文を受け、300社以上の寺院に提供するようになりました。

職人さんと手を結び伝統を守る

僧侶が着る衣服全般を法衣といい、色形に細かい規定があります。また恩衣、じきとつ直綴、袈裟、折五条など宗派や僧侶の階級によっても法衣の呼び方が変わります。袈裟の簡略版として、禅宗系では法衣の上から提げているバッグのよう

な四角形の布を絡子らくすというそうで、長さを調整する環の素材も様々です。一方真言宗系では小さな襟のような輪袈裟わげさを着用しますが、これはネクタイのようなもので個性が表れます。絡子も環も輪袈裟も僧侶個人の好みやお洒落心が発揮されるので、ここに注目すると楽しいかもしれません。草履や鼻緒の素材、幅についても個人の美意識やこだわりがあるそうです。柴田さんは法衣としてのしきたりと僧侶個人の趣味を融合させ、よいものを提供することに面白さを感じています。そして、仕事を進めていく上で一貫していることは和服に係る素材を育成し、布の加工や染める日本の伝統技術を守ることです。例えば袈裟の組紐・房は専門の職人さんにオーダーして作っています。今回の取材で見せていただいた手組みの組紐は質感、つやに優れ、たいへん美しいものでした。しかし、錦も麻も技術者の確保が難しいと心配されています。

深い知識で

「臨済宗では左肩から右脇にかけて衣の上を大きな袈裟で被います。これが大袈裟の言葉の由来と言われています」、片や「曹洞宗は鶴見の総持寺と越前の永平寺が二大本山制ですが、袈裟の結び紐を見せるか見せないかで系列がわかるのですよ」、柴田さんからは法衣についてのお話がどんどん出てきて楽しい時間が過ぎました。

絹や麻、木綿、そして染色、織り、刺繍を施した1つの布。その細部に行き届いた日本の伝統技能の魅力と美しさを大切に、深い知識を活かしてこれからも法衣づくりを続けられることでしょう。 (記 浅見 典子)



写真左から絡子，組紐，草履



あの街
この街

俊一郎が行く・14

「クロモジ」

おいしい水

こんにちは！ 自分がかかわる建物では、できることなら伝統的な工法や自然の素材が使われたものであってほしいと思います。いろいろな場所に出かけては、その土地の気候風土を感じ取り、地図を見てそれらの関係性を想像します。合理性を追求し続ける都会にいと縁遠く感じてしまう工法や素材を持つ、違った合理性に感心したりします。それは、永い時間の中でつくられた循環がつくり出す合理性だと思います。

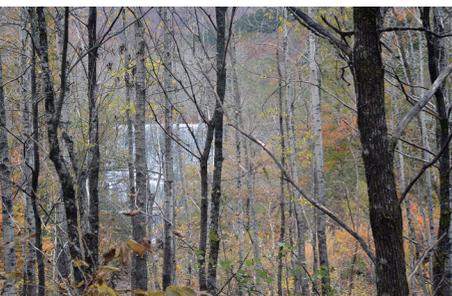
旅先の宿で、水道の水を飲み、沁み入るように感じたならば、お気に入りの場所となります。その水の味に、その土地の循環がもたらす「いとなみ」を感じるからかもしれません。

金沢の街と山

ここ2年あまり、よく金沢に出かけています。左官を使ったアートパネルの作成を頼むためです。金沢の街には2人の友人がいて、その友人との会話からの思いつきでした。その友人は、普段は山で林業を営む人たちから、間伐の際に出る副産物を集めて精油を作っています。左官の仕事も大詰めを迎え、一泊余分に金沢に滞在して、その山まで連れて行ってもらいました。

山、雨、川

友人のクルマは川に沿って白山の山道を進みます。川の名前は手取川。晩秋の頃は水が少なく、川底の石がゴロゴロと見え、そんな川底を眺めていると、「暴れ川」といわれる所以もわかる気がしました。



とまつりしゅんいちろう
都祭俊一郎

1975年生まれ。生まれも育ちも、東京の下町。
エンジュの新築の他、保育園や幼稚園の設計（新築及び改修）
を複数行う。（写真 新 良太）



冬、北陸には多くの雪や雨が降ります。その雪や雨が白山の山に降り、山々から集められた水が、金沢の平野を潤しているのです。この水の循環の要が、山の木々だと友人は言います。しかし、国産樹木の建材利用が低迷している現状のままでは、山を維持する人がいなくなり、これまでの「いとなみ」が維持できなくなると友人は心配しています。

手取川をこえて

川のざわめきも遠ざかり、紅葉も終わりかかった山は閑か^{しず}かでした。この山から取れる間伐材を友人は利用しています。クロモジの木、楊枝の材料としてよく聞くこの木は、主に杉などの間の低い所に生えています。しかしそれ故に、杉林を整備するときには邪魔になり、人手不足も相まって、今は使い道のないそれらの木は切られたまま放置され、山の荒廃の原因となっているのです。

友人曰く、クロモジには薬効があり、その芳香にも効能があるとか……確かに、大きな木に囲まれて日差しも少ない場所で、したたかに枝葉を広げるこの固い木には、その大きさからは計り知れない力がこもっている気がしました。

山の香り

友人が精油を作っている蒸留所にも連れて行ってもらいました。製材所の傍らにある蒸留所には、原料となるクロモジのチップと蒸留のための機器が並んでいます。原料のチップを口に含んで、かすかな甘みを楽しみました。

街の雑踏をくぐり抜けて自宅に戻り、分けてもらった精油を^{けいそうど}珪藻土の置物に滴らしてみる。ふわっと立ち上るやや甘い香りが、自分の中にしみ込みます。その香りは、自分を山の循環に戻してくれる気がしました。



あなたの街のやどかりさん

やどかりうまいもん巡り 浦和活動支援センター

ビルの一室で味噌づくり!!

「食」を味わう機会を

「浦和活動支援センター」（以下、支援センター）は、精神障害のある人たちの日中の憩いの場として、北浦和駅近くの雑居ビルの3階にあり、近隣の40数名が利用しています。

さいたま市は見沼田んぼに代表されるような自然が豊かな地域ですが、メンバー（やどかりの里を利用する精神障害のある人）たちは、食べ物の匂を感じたり、土に触れる機会が少ないようです。そこで支援センターでは、食を通じた体験を広げる取り組みを始めました。週1回のランチづくりや見沼区にある「やどかり農園」を訪ねての大根掘り、麦踏み、大豆脱穀、切り干し大根づくり……なかでも、埼玉在来品種の大豆で作る味噌づくりワークショップはとても好評でした。

味噌づくりに汗、汗！

味噌づくりは、前日に大豆を水に浸すところから始まります。翌朝、その大



第17回

やどかりの里は、相談支援事業所やグループホーム、働く場の他、通うことで生活のリズムを整えたり、人との関わりを深めたりする「憩いの場」があります。生活面でも健康面でも「食」は大切な営みですが、やどかりの里の各事業所でも、「食」に関するプログラムやこだわりのメニューがあります。「やどかりうまいもん巡り」として「食」を切り口にご紹介したいと思います。

豆を柔らかく茹でて潰します。工場などたくさん作る場合にはすり潰す機械を使うそうですが、私たちは厚めのビニール袋に豆を入れ、指やビール瓶などで潰しました。2人組になり交代しながらの30～40分、みんな汗だくになりました。「完全に潰れていなくても、それも手づくり味噌らしさ、私はすこし粒々が残るくらいが好きよ」という経験者の意見もあり、「よし、これでいこう！」と各チームが納得いくタイミングまで潰して最終段階へ。

最後は、塩と麴こうじを混ぜてテニスボールくらいに丸め、桶の底にたたきつけるようにして詰めていきます。間に空気が入るとカビが発生するとのことで慎重に、かつ大胆に。

同じ材料なのに少しずつ違う

そして出来上がりは半年後、風通しの良い涼しい場所に置くと良いということで、支援センター内で置ける場所を探すと普段使用していないお風呂場のみ、不安になりながらの半年でしたが、いざ出来上がりを食べてみると美味しい！

同じ材料なのに樽ごとに少しずつ違う味。「味噌ってこんな風にできるんだね」「熟成すると味が変わるのかな」など興味が広がりました。

今年も味噌づくりの季節が近づき、今年をもっとおいしく作りたい！と期待が高まっているところです。

(記 尾形 志保)



おいしいパンが人をつなぐ

焼きたてパンの店
(有) オルブロート・パンジー

かしろ あつし
嘉代 敦志さん

うごもり しげき
鵜籠 重喜さん



左から社長の嘉代さん、パン職人の鵜籠さん

天沼の地に 30 年

やどかりの里が運営する喫茶ルポーズで、10年ほど前からパンを仕入れているオルブロート・パンジー（以下、パンジー）さん。見沼区天沼町にあるお店に入ると、パンの焼けるいい香りが漂います。

ももとは浦和で営業を始め、調理スペースが狭かったことと、移動販売に力を入れるために天沼町に引っ越してきて、約30年になるそうです。

「成り行きでなんとなくパン職人になった」と話してくれたのは、社長の嘉代敦志さん。始めは手伝いのような形でお店に入り、パン職人の鵜籠さんから比較的簡単なあんパンの作り方などを習いながら（あんは固いのでチョコレートパンなどより比較的簡単なのだとか）、やっていくうちにパン作りが好きになったそうです。

パン作りで表情が変わった

パンジーさんは、特別支援学校でパン作り教室も行っています。さいたま市の教育委員会の方がさくら草特別支援学校の給食用に卸してくれるパン屋を探していて、卸し始めたのがきっかけだそうです。先生方の熱心な要望により、パン作り体験教室を始めたとのことでした。

4～5年続けているパン教室は、生徒だけでなくそのご家族も参加し、楽しい時間を過ごしているそうです。嘉代さんは、ある先生から「それまで表情や反応の乏しかった生徒が、パン生地を触りながら、表情が変わった」という話を聞き、それがとても印象に残っているそうです。

また、卒業した生徒がパン屋に就業したこともあるそうで、とても嬉しかった、と話されました。

ご近所のお客様とともに

お店は住宅街の中に位置していることもあり、顔見知りのお客様がほとんど。最近のご近所のお客様も高齢になってきたことから、店舗にスロープをつけました。「時にはお客様のお宅まで、手を取りながらいっしょに帰ることも増えてきました」と、こともなげにお話する姿に、人との温かいつながりを感じました。

「お店で売れるパンも昔と変わり、最近はおやつ用の菓子パンなどが売られていますね。よくお客様に、昔懐かしいパンだねと言われますが、自分でもそう思っています」とパンへの思いを語って下さいました。

とても明るくて気さくな嘉代さんと、これぞ職人気質という鶴籠さん。お話を伺っていると、10年ほど前に喫茶ルポーズで提供するパンを探していた時、パンジーさんのイギリスパンを食べて、「これしかない」と思った日が思い起こされます。ルポーズのお客様からも「このパンはどこから仕入れているの」とよく質問されます。その時は、当店自慢のトースターも含めてパンジーさんをご紹介します。「ただ焼くだけのトースト」と侮るなかれ、パンジーさんのパンを使ったトーストやピザトーストは、他では絶対に食べられない

ほどのおいしさ。自信をもってお薦めします。ぜひご賞味ください。ほんとうにびっくりしますよ！

(記 田中 学)



(有) オルブロート・パンジー

さいたま市大宮区天沼町 2-906

TEL 048-783-2199

営業時間 / 6:30 ~ 18:00

定休日 / 日曜・祝日

喫茶ルポーズ

さいたま市大宮区天沼町 1-136-2

Tel 048-657-0202



インフォメーション

喫茶 ルポーズ



営業時間 月～金 10.00-17.00
さいたま市大宮区天沼町 1-136-2

募集

- ☆作品展示したい方
- ☆雑貨販売したい方
- ☆貸しスペースあります

詳細は ☎ 048-657-0202

天沼1丁目
スーパーバリュー
○ 大宮天沼店

大宮駅 喫茶ルポーズ

あゆみ舎が使用済み PC の回収を始めました！

不要になった PC・携帯電話・スマホを無料でご自宅へ引き取りに伺います。持ち込みも大歓迎です。データ消去作業は株式会社アンカーネットワークサービス (<http://www.anchor-net.co.jp/>) が責任をもって消去いたします。

問い合わせ先 あゆみ舎

〒 330-0804 さいたま市大宮区堀の内町 1-37-103 TEL 048-648-2555

受付時間 月～金 (祝祭日は除く) 9:00-18:00

埼玉県産小麦粉を使用 手づくりまんじゅう

まごころ

さいたま市中央区本町東 5-9-7
Tel. 048-857-2783 Fax. 048-857-2769



おいしく食べて
健やかに

栄養バランスのとれた
お弁当で食生活を支えます



昼食 1食 550円

月～金、1食からお届けします！

- *おかゆや刻み食も対応します
- *ご希望の曜日にお届けします

エンジュ TEL 686-7875

<受付>月～金 (祝日を除く) 8:30～18:00

インフォメーションコーナーの
掲載広告を募集しています！

1マス (64mm*46mm) 5,000円

すべての人々が人間らしく豊かに育ちあえる地域づくりをすすめるために
こうぬまふくしかい

社会福祉法人 鴻沼福祉会

こころを込めた手づくりの品をぜひご賞味ください！

つばさ共同作業所・そめや共同作業所

いちず
とうふ屋 一豆

TEL 048-854-8000
FAX 048-854-3538
さいたま市中央区上峰2-10-20

つばさ共同作業所とそめや共同作業所が手がける、
国産・手づくりこだわった本格とうふ。
宮城県産高級大豆「ミヤギシロメ」を
100%使用しています。
大豆本来の濃厚な甘さとコクを味わえる
“小さなぜいたく”を食卓にお届けします。



きりしき共同作業所のパンは食の安全・安心に
こだわり、原材料に国産小麦粉を使用しています。
(一部商品を除く)
この道30年の職人とともに手がけるパンは、
少し懐かしい味と香りがします。

きりしき共同作業所

きりしきのパン

TEL 048-854-6910
FAX 048-854-6942
さいたま市中央区円阿弥1-3-15
鴻沼福祉会館内

そめや共同作業所

弁当屋 いちず

TEL・FAX 048-684-1257
さいたま市見沼区染谷2-145

弁当屋いちずのお弁当は、忙しい毎日を
過ごす方たちに1食でもバランスの良い
食事をしていただきたいと、
副菜や小さなおかずにも野菜をたっぷりと
使って作っています。



鴻沼福祉会から読者の皆様へ

鴻沼福祉会では、袋詰め・部品組み立て作業や清掃作業、
資源回収など、地域の企業様のニーズに応えるべく様々な
仕事を受注しています。

働くことをとおして障害のある人がさらに輝けるチャンスを求めて
新しい仕事にもチャレンジしつづけています。

障害のある人たちの就労支援、生活支援、
相談支援のスタッフを募集しています！

お問い合わせ先：048-854-6890 (担当オガワ)

鴻沼福祉会事業所一覧

●本部・事務局 埼玉県さいたま市中央区円阿弥1-3-15 鴻沼福祉会館内 TEL：048-854-6890 FAX：048-856-0313

《はたらく》●つばさ共同作業所(中央区) ●あざみ共同作業所(見沼区) ●そめや共同作業所(見沼区) ●きりしき共同作業所(中央区)
●さいたま障害者労働センター(桶川市)

《くらす》●第1たかさご荘 ●第2たかさご荘 ●第3たかさご荘 ●かえてホーム ●かりんホーム ●よつばハイツ
●なつめホーム(以上、中央区) ●のぞみホーム(見沼区)

《ささえあう》●中央区障害者生活支援センター来夢 ●地域活動支援センター来夢(以上、中央区)
●見沼区障害者生活支援センター来人(見沼区)

大宮見沼 よみさんぽ

作者紹介

写真家 野口勝宏さん

のぐちかつひろ／写真家. 東日本大震災を機に「福島の花の美しさで世界の人々を笑顔にしたい」と「福島の花 Flowers of Fukushima」シリーズを制作. 全国各地での写真展開催のほか, 病院や福祉施設などでの展示も手掛ける. また, 2016年5月より国内就航を開始したANAの復興支援「東北FLOWER JET」の機体を福島や東北の花々でデザイン. 全国に明るさを届けたいと活動を続けている. 野口勝宏オフィシャルサイト <http://noguchi.photo>

表紙: 椿, センリョウ, 白梅, 松

明けましておめでとうございます.

花を見ると何故か穏やかな気持ちになり自分の想いを伝えてくれるような感覚になります.

国や文化の違いを越えて花の心地よさを共有し, 笑顔の花を咲かせたいと願っております.

題字 宗野文さん

学生時代から書道が大好きで, 子育て中の今, 我が子とともに習字に再挑戦中. やどかりの里の作業所「すてあーず」所長. 見沼区南中丸在住.

大宮見沼よみさんぽ 第20号

発行 2017年1月(冬号)

編集 「大宮見沼よみさんぽ」編集委員会
〒337-0026 さいたま市見沼区染谷
1177-4

Tel 048-680-1891

Fax 048-680-1894

E-Mail johokan@yadokarinოსato.org

<http://www.yadokarinოსato.org/>

発行 公益社団法人やどかりの里

理事長 土橋敏孝

印刷所 やどかり印刷

公益社団法人やどかりの里は, この大宮見沼界隈で障害のある人たちとともに地域で生きることを目指して活動を続けています. 私たちは長年この地域で活動し, 地域の皆さんに支えていただけてきました.

そして, この地域の人々が織りなしてきた歴史・文化, 守り育ててきた自然, 地域に根づいた事業等々をもっと知りたいと思うようになりました. 合わせて, やどかりの里のことも皆さんにもっともっと知っていただきたいと「大宮見沼よみさんぽ」を創刊いたしました.

「大宮見沼よみさんぽ」編集委員一同